

美術と戦争 山本 淳夫

岡本光博 個展『赤絨毯』

2006年12月1日-24日 海岸通ギャラリー・CASO (大阪)

『戦争と芸術 美の恐怖と幻影』

2007年1月10日-2月2日 京都造形芸術大学 ギャラリー・オーブ

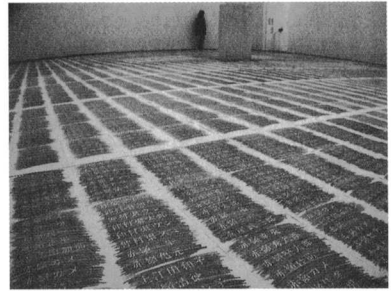
年末から年始にかけて、いずれも戦争をテーマにした展覧会が相次いで開催された。わたし自身「中ハシクシゲ展」(滋賀県立近代美術館)をやり終えた直後だったこともあり、意識してふたつの展覧会に足を運んでみた。

ひとつめは岡本光博の個展『赤絨毯』である。広々としたCASOの展示室の床に、赤鉛筆でラフに塗りつぶされた紙片がびっしりと敷き詰められている。沖縄の摩文仁の丘にある「平和の礎」の表面を、作家が延々とフロッターージュしたものである。近づいてみると、無数の人名が白く抜けてみえる。モニュメントには合計23万人もの沖縄戦の戦没者名が刻印されており、展示されているのはごく一部に過ぎないのだが、こうして視覚化されると、改めてその膨大さに圧倒される。「赤絨毯」とはいうものの、とてもこれらの人々の名前を、しかも血を連想される色を踏みつける気にはなれないが、現在の我々の生活は、紛れもなくそのうえに成り立っているのである。

京都造形大学ギャラリー・オーブでの「戦争と芸術」には横尾忠則、杉本博司、宮島達男、神谷徹とそうそうたる顔ぶれが参加しているが、最大のポイントは、何といても藤田嗣治の戦争画《南昌新飛行場爆撃ノ図》である。防衛省が管轄する江田島教育参考館の所蔵品で、館外で展示されるのは非常に珍しいことだという。初日のシンポジウムの中で、観客席から発言された林洋子助教授の解説が非常に分かりやすかったが、この作品の原画は横5メートル以上の大作《南昌新飛行場焼打》(東京国立近代美術館蔵)で、藤田の戦争画としては前期にあたるそうだ。まだ画家が実際に従軍して取材可能だったころのもので、戦局が悪化するととてもその余裕はなく、藤田はイメージネーションを駆使して《アッツ島玉砕》などの血みどろの玉砕図を描くことになる。展覧会には見るものの議論を誘発する意図が明快に現れている

が、通常の展覧会以上に展示とシンポジウムとが相互補完的に一体であるように感じた。

折しもイーストウッド監督の映画、硫黄島二部作が話題を呼んでいるが、これらすべてに共通しているのは、今なお現実に存在し続けている「戦争」を、まずは直視しようとする態度に他ならない。もちろん大前提として戦争はかなわんのだが、おまじないのように「反戦」を唱えることが免罪符とはなりえないし、むしろ全体主義のもとでの思考停止に繋がりがかねない、そのことは肝に銘じておきたい。



岡本光博 (NS#313 赤絨毯)



『戦争と芸術』 展示風景
撮影：河田憲政

やまもと あつお/滋賀県立近代美術館 主任学芸員
2006年とはかく忙しかった。今年は一呼吸を調べて… と思ったら大厄に当たっていることが判明。体力、記憶力ともにとんどん怪しくなるし、さて、厄神さんにでも参ってみようか。